新註日本短篇文學叢書

文學博士　吉澤義則監修

たけくらべ

文學士　藤田福夫校註

河原書店

文學博士　吉澤義則監修

新註日本短篇文學叢書　21

たけくらべ

文學士　藤田福夫校註

新註日本短篇文學叢書

京都大學名譽教授
文學博士
吉澤義則 監修

昭和二十四年五月二十五日印刷
昭和二十四年六月五日發行

たけくらべ　定價八十圓

著者　藤田福夫

發行者　河原武四郎
京都市河原町通四條上

印刷者　富森茂彥
內外印刷株式會社
京都市西洞院通七條南

發行所　河原書店
京都市河原町四條上ル
電話本局五八三七番
振替京都二一五八番

凡例

(1)本書は高等學校程度の國語科副讀本として編纂したものであるが、一般の教養的讀物としても、その要求に應じるやうに考慮した。

(2)本書の本文は博文館刊行の「眞筆版たけくらべ」（初版大正七年十一月）に據つた。

漢字、假名遣、送假名、句讀點等はすべて原文の儘である。

但し、原文の漢字の殆ど全部につけられてゐる振假名は特殊なものを除いて省略した。例へば原文（一）の大門（おほもん）、大厦（いへ）、提燈（かんばん）等のそれを存し、全盛、胡粉等のそれを省いた如きである。

又筆勢上略して書いたと思はれる漢字は正體に改めた。（一）に於いて「弌」を「此」に（二）に於いて「氕」を「氣」に改めた如きである。變體假名は現行の文字に改めた。

各段の番號につけられた括弧は省いた。

(3)頭註は主として地名、人名、件名、風俗習慣、年中行事等について施し、引用歌詞はつとめて全部を註記するやうにした。又古典との關係の明かな箇所は之を指摘し、文學的表現に於

いてすぐれてゐる點も簡單に注意を喚起した。本書の頭註は之を充分利用されれば內容の研究、鑑賞に進まれる事が困難でないやうに心掛けたものである。

(4)解題は定說に從ひ、要點を示すのを旨として簡潔に記したが、詳細は參考書欄に揭げた諸書について見られたい。

昭和二十三年十一月

藤田福夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

解題

一、書名

「たけくらべ」といふ語もさうした事實も作中には無いが、これは內容を象徵的に表現したのである。そしてその名稱はかの伊勢物語二十三段に見える、

筒井筒ゐづつにかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに

くらべ來しふりわけがみも肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

の歌を贈答した物語に着想を得たものである。全部假名書の雅語ばかりに依る題名は一葉の他の作にも多いが、この場合古典の背景と相俟つて殊の他效果的である。性に目覺めた少年少女の日への鄕愁は旣にこの題名に凝縮せられてゐるのを感じる。

尙、後に觸れるが、たけくらべの下地になつた作の題名は「雛鷄」であつた。

二、著者

本名樋口夏子、一葉はその號である。明治五年舊三月二十五日東京市麴町區山下町の東京府廳官舍で舊幕臣（與力）樋口則義の第四子として生れ、明治二十九年十一月二十三日二十五歳を以て本郷區丸山福山町四番地の自宅に於て死去した。

明治十六年母の意見に依り小學校を中途退學し、明治十九年中島歌子の歌塾に入つた。その師弟關係は晩年に迄及び、其處で得た古典的教養と士族氣質の殘つた家庭の環境とは強い影響を作品の上に投げかけてゐる。二十二年に父死し、二十三年からは母・妹と三人で仕立物の賃仕事を始めた。小說の處女作は二十四年の「かれ尾花」と思はれる。同年通俗小說家半井桃水を訪ひ、その指導を受けた。翌年桃水の關係せる雜誌「武藏野」に小說「闇櫻」「たま襷」などを發表し、兩者の間には愛情が芽生えるやうになつたが遂に結ばれることなく終つた。二十五年以後作品漸く多く、二十六年以後「文學界」の同人達と交際し、同年七月「たけくらべ」の素材を得た龍泉寺町に轉居して荒物・駄菓子等の店を始めた。二十七年五月本郷丸山福山町に

移つたが、その家には平田禿木、馬場孤蝶、戸川秋骨等の文學界同人や幸田露伴、三木竹二、齋藤緑雨等が來訪した。文名の最も揚つたのは明治二十八年からで同年九月文藝倶樂部に發表した「にごりえ」はその聲價を決定的なものにした。二十九年春から肺患の兆しあり、八月病漸く重く、十一月二十三日死去した。現在の樋口悅氏は一葉の妹邦子の子である。「雪の日」(二十六年)「琴の音」(同)「花ごもり」(二十七年)「やみ夜」(同)「大つごもり」(二十七年)「たけくらべ」(二十八年)(二十九年)を「文學界」に、「にごりえ」(二十八年)「十三夜」(二十八年)「われから」(二十九年)を「文藝倶樂部」に發表した。その他「うつせみ」(二十八年讀賣新聞)「わかれ道」(二十九年國民之友附錄)「うらむらさき」(二十九年新文壇)等の作があり、他に「そぞろごと」(二十八年讀賣新聞)等の隨筆及び三千七百餘首の短歌の作がある。

一葉は彼女を中心とする女三人の苦しい生活の餘暇を以て上野の圖書館に行つて讀書し、深夜寢ねずして執筆することも多かつた。その生活記錄たる日記を見れば幾度か借金や質入れをし、小商賣の資を得る爲にはなけなしの帶や着物を賣却してやつと十五圓の金を得た事などが記されてゐる。かうした境遇に於て彼女の小說執筆は誠に切實な生活上の要求によつてなされ

たものであり、彼女は正に生活と鬪つて病に斃れたのである。短い生涯の終り僅々五六年の間にめきめきと文才を表はし得たのは一つには古典的風潮が強く殘存してゐた時代と言ふよい時機を得たことや、當時としてはまだ類の少い女流作家としての珍しさもあつたことにも依る。しかし、より本質的には鋭い心理分析の目、批判的に周圍を見る事の出來た勝氣な性格、優れた記憶力と言ふ天分と父に依つて最初方向づけられた古典的敎養の力、文學界同人達との交友、貧困の爲に生活環境が下層社會に近づき、ともかくも彼女の作に社會性を與へる契機となつた事などの內外の諸條件を見逃し得ない。

三、成立

一葉が最初たけくらべの筆を執つたのは明治二十八年の一月で一氣に作り上げたものでなく、後に示す「文學界」の掲載順でも分る通り約一年を經て成つたものである。その間の事情を物語るものとして「一葉に與へた手紙」（樋口悅篇。猪場毅註釋。昭和十八年一月。今日の問題社刊）中に星野天知（文學界の編輯者）より一葉に宛てた手紙がある。

……前文省略……闇夜大つごもりと引續き御面倒願候後又々御無心にて恐入候へども是非御盡力願上候

二十四日朝の中迄は本町へ御稿御屆被下度何分編輯の晦前無理なる御願ながら申さで協はぬ仕義是非〳〵

御聞濟被下度願上候　先は御願まで匆々

この依頼の手紙の日附は一月二十二日であるから實際に一葉が「たけくらべ」の執筆にとりかかつたのはそれ以後としなければならない。たゞ同年一月二十日の日記にも戸川殘花が訪れ、毎日新聞の附錄に何か書けと言ひ、「稿をば二十六日までにといふ、文學界のかたもせまれるをこはいとあわたゞし」とあるのは手紙より前に何か下交渉があつたのかも知れない。

尙「眞筆版たけくらべ」に馬場孤蝶氏が紹介して居られる「たけくらべ」の未定稿「雛鷄」は原稿紙四枚のもので、字句にさして異同が無い由である。恐らくこれも依頼を受けて後執筆したものであらう。

いづれにしても「たけくらべ」は右の手紙や日記によつて二十八年一月下旬に執筆せられたものであると考へて差支ない。殊に次の手紙が示す如く、一氣に作られたものでないのであるから、交渉を受けて最初の部分を取り敢へず作つたのであらう。即ち二十八年十一月二十日附

の星野天知發一葉宛の手紙に

編輯の爲め田舍より歸り來り候所机上いまだ御貴稿を見ず大に懸念に堪へず候まゝ筆を走らして御願申上候落葉の候もの淋しく今月の誌上はまことに肅條の色相見へ申候間先月よりの御約束をたのしみに罷在候……編者の苦痛萬々御察しの事とは存候へ共尙偏へに願入る事に御座候ことがたけくらべものと御助願上候也

とあるのは文學界に連載中の「たけくらべ」が休載勝ちであつたのに對して督促依賴してゐるのである。

「たけくらべ」の載せられた「文學界」は二十八年一月、二月、三月、八月、十一月、十二月、二十九年一月である。又後改めて二十九年四月「文藝倶樂部」に一括掲載せられ、始めて衆人の注目を受けた。

四、內容概觀

明治中期の新吉原に接する大音寺前界隈を背景にして土地柄早熟な少年少女達の生活を甘美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

流麗な詩的情緒に富む雅俗折衷の行文で寫し出したものである。人物關係の基調は美登利、正太郎、信如の戀の三角關係にあるが、作者の主體性は背後に隱れて物語的情趣點が全篇を蔽ふ作である。然し一面又リアルな物の見方をして居り、その描寫の間に作者の現實社會への關心や戀愛に對する態度等の翳を捉へる事が出來る。

大體の筋は次の通りである。横町組の子供大將長吉は表町の田中屋の正太中心の仲間に對し、かねがね對立して來たが、來るべき八月二十日千束神社の祭日に宿怨を晴らさうと思ひ、味方の總大將に溫和で人望ある龍華寺の信如を賴んだ。一方全盛の遊女大卷を姉に持ち、氣だてもさつぱりとして子供仲間の女王と言はれてゐる美登利とその親しい美少年正太たちの側では祭の夕刻樂しい幻燈會が始まらうとしてゐた。正太が一寸家に歸へつた時長吉達が暴れ込んで罪のない三五郎をたゝきのめし、店先に踏み入つて狼籍をつくし、美登利の額には泥草履がとんだ。後日正太は氣を腐らした美登利を自分の家に招き入れて慰めたりした。美登利はかねて信如と學校を同じくし、ほのかな好意を感じて來たが喧嘩の日以來彼女の負け嫌ひの性格からの口惜しさで學校へも出なかつた。さて信如の父和尚は酉の市には店を出す程のさばけた僧で

あつたが、信如は凡そ反對の內氣な性質で祭の喧嘩にも外出中で全然關與してゐなかつた。玉菊の燈籠まつりも過ぎて秋雨しと〳〵と降る淋しい夜、信如は美登利や正太のきしやご遊びに興じてゐる筆屋の店先を通り過ぎたが、美登利は口では惡しざまに言ひつゝも何時までもその後姿を見送るのであつた。秋しぐれして風の强い或る日信如は田町の姉のもとへ行く途中下駄の鼻緒を切り、已むを得ず大黑屋の門に傘をよせかけて繕つてゐたが、それを信如と知つた美登利は顏うち赤め、胸は動悸して渡さうと思つて持ち出した友仙縮緬の切れも手渡し出來ず、物も言はず格子の間から投げ出したに過ぎなかつた。信如も美登利と知つては不器用な手が一層動かず、漸く繕ひを終へて目にしみる友仙の紅葉に名殘りを惜しんでゐたが、折から長吉が來合はせて自分の下駄を貸し與へ、自らは尻端折つて立去つた。やがて三の酉の賑ひが來たが正太の期待にはづれて、處女の日を迎へた美登利は大島田の姿美々しく立現れ、近寄る正太に對しても不機嫌で、口重く打萎れてゐるばかりであつた。正太、三五郎の交友は元に變らなかつたが、美登利はもうその後は町の子供仲間と遊ぶ事はなかつた。或る霜の朝、美登利の家の格子門の外から水仙のつくり花を挿し入れて置いた者があつた。それを美登利は何故ともなく

懐かしく思つて一輪挿しに生けて清らかな姿を愛でたが、それはかの信如がなにがしの學林に入る前日なのであつた。

五、文學史的地位

一葉の活躍した明治二十年代末葉は日清戰役前後の我が國資本主義の發展期に當つて個人的自覺が明確に現れ來つた時代であるが、半面二十年代前期の國粹的反動期の流れを汲んでゐると共に戰勝後に來た國民的自負の昂揚した時代であつた。明治初年以來の自由民權的思想に加ふるにキリスト教的精神主義が清新な魅力を以て進歩的青年の心を捉へる半面國家主義道德主義が稱へられて新舊過渡の動搖期であつた。

この時代の先端に立つて「文學界」の若き人々は主としてキリスト教的思想を背景にして、或は因襲道德に反抗し、或は典雅な美への憧憬を示し、ローマン的憂愁の翳濃いものがあつた。

一葉の作品の相當多くがこの「文學界」に發表されたものであり、同人達との交りも多かつたが、彼女の作品は平安朝的美的情趣の面に於て「文學界」の人々と共通するものは見られた

ものゝ、その文學觀に於て又新時代の自我の目覺めの點に於て決して同一段階のものではなかつた。沒落する士族階級の出身である彼女の作には舊い日本の女性が虐げられて發する絕望の溜息は聞かれるが、それはやがて運命と觀じてあきらめられて行くのである。さうした苛酷な現實を冷靜に客觀視し、新しい建設を積極的に願ふ事はなかつた。優れた天分と投げ込まれた現實との戰ひのために彼女は舊時代的環境に育つた人として進み得る所まで進んだけれどもやはり越える事の出來ぬ限界のあつたのは事實である。

「たけくらべ」は彼女の作品中最も彫琢せられた珠玉のやうに美しい代表作品であるのみならず明治文學史中の傑作の一つである。彼女の長所は此處で最もよく發揮せられ、鷗外は「めざまし草」（卷の四明二八）に於て「われは縱令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも此の人にまことの詩人といふ稱をおくることを惜まざるなり」と讃嘆したが、誠にそれは舊時代最後の美しい開花であつた。全體として彼女の作品は抒情詩的雰圍氣に滿ちて居るが、殊に「たけくらべ」は然りである。上田敏は「春は櫻の賑ひよりかけて」の一節を評して、「悲愁を湛へてしかも沈靜あり靜思あり」と賞揚したが、この一節こそは抒情詩氣分の頂點を示すものである。「たけ

くらべ」一卷の持つ特徴は右の渾然たる情趣美の中に女主人公美登利を點出して當時としては稀なリアルな手法を以てその性格や心理を巧みに描寫し、殊に性に目覺め行く過程に現はれる心理の機微なる變化を捉へた點をはじめ、その他の少年達も躍動する筆致で個性的に描いてゐる點、吉原界隈の特殊な地方色を韻律重視の流麗な雅俗折衷文に依りながら寫實的に而も卑俗味を伴はずに描き出した點にある。文體は當時既に言文一致の小說が現はれて居り、彼女自身も或る程度の自覺に達してゐたが、それを實現する事は出來なかつた。然し彼女の世界にはあの過渡的な文體が最も適してゐるのは勿論である。

尙又彼女の作品には王朝文學や西鶴の文章の影響があり、「たけくらべ」も亦その例に洩れないが、前者については永年の舊派和歌の敎養が根底に大きく働いてゐる。後者は比較的形式的な表現法の上に止つてゐるが、これは當時の元祿文學復興の機運に依るものである。かうして彼女は文壇と沒交渉ではなかつたが、本質的には文壇の外にあつて何よりも自らの天禀を生かす事に依つて當時としては驚異に値する心理描寫と寫實とを雅俗折衷文の制約にもかゝはらず成し遂げ得た。彼女は舊時代的な枠の中で伸びられる丈け伸びたが、社會觀、人生觀の

上からも手法上からも乃至文體の上からも新舊交替の境界點に立つたのであつた。情緒的爲實主義といふ獨自の詩境を以て輝く「たけくらべ」の史的意義も亦其處にあるわけである。

六、傳本

大正七年十一月博文館發行の「眞筆版たけくらべ」に影寫せられてゐる原稿は執筆當時のものでなく、「文學界」への連載が終つた後二十九年四月改めて「文藝倶樂部」に一括掲載された時作者自身書いたものである。（九回の終りの所四頁だけは原稿紛失の爲上梓の折に妹邦子が補つた）

故に「文學界」に送つた最初の原稿は別にあるわけでこれは大阪の星野清一氏藏のものが石山・榊原兩氏の「評釋傳記たけくらべ」の卷頭に寫眞版として出てゐるが、今日その全部が殘存してゐるかどうかは未だ知らない。今「文學界」掲載の本文と眞筆版とを比較するに漢字・假名遣・送假名・助詞等の差が多少見られる。

前記未定稿「雛鶏」は眞筆版の跋文に依ると四頁しか無く、文章にも大差は無いがその塗り消された部分はやゝ長文になつてゐる。眞筆版と一葉全集本との間には假名や漢字の使用上多

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo